

漆紙文書における印影検出の可能性

Possibility of Detection of Seal Marks on *Urushigami-monjo*

古尾谷知浩

はじめに

① 平城宮第259次調査出土漆紙文書

② 他の現存印影との比較

おわりに

【論文要旨】

本稿は、捺印された文書が漆紙文書として確認できるか否かという問題について、平城宮跡出土の資料を例示して検討を試みたものである。

漆紙文書において印影が検出される可能性は従来から指摘されている。断片的にしか残されていない文書の作成・伝達過程を明かにする上で、印影は重要な情報を提供するはずであり、注意深く観察する必要がある。特に諸国からもたらされた京進文書が出土する可能性の高い都城遺跡では、このことを念頭に置かねばならない。

この観点からみて、平城宮第259次調査において、造酒司南を通る宮内道路の側溝から出土した漆紙文書は注目すべき資料である。この資料は界線、書体などの特徴から京進文書であると考えられるが、文書の書かれた面に茶褐色の方格状を呈する幅約2mmの線が認められる。この部分には顔料は観察されず、この方格線が印影の一部であると認定する積極的な根拠はない。しかし正倉院文書の中の、諸国で作成した帳簿類にみえる印影の例と比較した場合、文書の内容、形態からみて国印が捺されていたとみた方が自然であり、方格線そのものの形態や、その位置からみても国印の印影であると考えて矛盾はない。

今後、類例を検出することで、本例の資料的価値を確認していくとともに、「出土印影」をも古印研究の素材として提供していくことが課題となる。